

# 古代ローマの風景画とその自然観についての研究

## ——室内空間と外界をつなぐ窓としての風景画——

武関彩瑛<sup>※1</sup>

### 概要

本研究は、古代ローマの壁面にタブロー画のごとく描かれた風景画が、現実世界の自然描写に影響を受けた表現を有し、あたかも窓のように外界と室内を接続する役割を持っていた可能性について考察するものである。従来行われてきた作品の図像的研究に、実際に邸宅を取り囲む自然環境や文学に表われる自然表現との比較を加えることで、当時のローマ人が抱いていた自然観と照らし合わせて研究を進める。

### 研究背景と目的

古代ローマの邸宅建築において、中庭とともに室内を彩ったのが色鮮やかな壁画であった。壁画には神話や静物、風景など様々なジャンルのものが描かれたが、自然主義的に景観を捉えた風景画は、それ以前のギリシア美術などにはみられないローマ美術独自の表現であった。本研究ではこの室内装飾としての壁画、なかでも風景表現を含むものに着目し、周囲を取り巻く環境からの影響について考察する。古代ローマの邸宅では、風景画を通して外界とのつながりが築かれていたことを明らかにする。

これまで古代ローマの風景に関する研究は、牧歌詩などの文学に表われるような理想的表現と、古代文献や建築遺構に認められるようなローマ人が身近に目にすることの出来た現実の眺望とが切り離されて論じられてきた。美術作品においてその対立構

図はより顕著で、トポグラフィー的表現が実際の地理的状况と比較しながら論じられてきた一方、具体的な場所を示す表象をもたない風景表現は主に理想的表現として扱われるばかりであった。そのため、現実の風景が絵画空間にどのように反映されているかという点は限定的にしか追求されず、本来ローマ人が享受していた身近な自然風景と絵画との関係は、古代ローマ風景画研究の中で等閑視されてきた。そこで本研究は、作品の図像的研究に実際に邸宅の身近な環境との比較を加え、理想的表現として論じられてきた風景描写を捉え直す。従来の風景画研究に欠けていた視点を補うことで、古代ローマにおける室内空間のあり方を再考し、ローマ人の風景観・自然観が室内にもたらした影響を明らかにする。

<sup>※1</sup> 東北大学大学院文学研究科博士課程後期3年の課程

## 研究成果と考察

現地資料やフィールドワークによる古代ローマ風景画の総覧的な研究が困難となったため、研究手順を部分的に変更して研究を進めた。まずは、比較対象とする風景表現の絞り込みについて、文学作品における記述を手がかりに進めた。

文学史料において、これまで先行研究において絵画と比較されてきたのは『牧歌』などに表われる理想的自然の描写であった<sup>1</sup>。しかし、友人にあてた書簡や随筆といった文学の中には、生活に近い自然や、理想的ではない自然を語るものもある。これらは、古代ローマにおいて、そもそも自然とはどんなものとされていたのかを知るための史料となる。当時の自然観と風景画の中に描かれる風景表現との関連を考察するため、こうしたローマ文学に着目した。

最も生活に近い自然描写は、邸宅から見える自然を指すものであった。その最たる例と言えるものが、初代皇帝アウグストゥスと二代皇帝ティベリウスの時代にナポリ湾に浮かぶカプリ島の海辺や高台に建てられた、複数の皇帝別荘や邸宅群である<sup>2</sup>。別荘は、海岸線に沿って長い柱廊を有していたり、窓を額縁として、景色を絵画のように切り取ってみせる窓を備えていたり、さらには、半円形に突き出したテラスを有していたりと、皇帝たちが十分に景色を楽しむことのできる作りであった<sup>3</sup>。ほかに

も、皇帝以外の富裕なローマ人たちが自宅内の庭を自慢する書簡が確認でき、彼らが身近な自然を楽しんでいたことがわかる<sup>4</sup>。壁画においても、窓あるいは開口部の奥に風景描写や生い茂る木々が描かれる作例がしばしば見受けられる。その一例が、ポンペイ「小さな噴水の家(Casa della Fontana piccola)」のペリステリウムである。室内の柱が奥まで続いているかのようなトロンプ・ルイユ的表現に加え、その柱のむこうには風景が描かれている(fig. 1)<sup>5</sup>。空間の限られた街中において、広いペリステリウムを設えるのは簡単なことではない。そのため、こうしたトロンプ・ルイユ的表現や、窓の向こうの風景を見せるかのような表現で、空間を拡張させているのである。また、こうした家に住むのは、決して下層市民ではなかったが、皇帝や帰属のように郊外の別荘を持てるような身分でもなかった。そのため、現実には窓から見える風景を誇ることはできないが、こうした壁画を自宅に描くことで、高位のローマ人の享楽を疑似体験していたのだろう。

また、古代ローマ人はわざわざ「風景画」という新興のジャンルを好み、自然に好ましい印象を抱いているようにも思われる。しかし、文学表現の中には自然に対して不快な感情をむけることもしばしばであった。特に畏怖の念とともに嫌悪の対象となったのは、森であった。森(foris)は、もともと「外」を意味する語であり、ローマにとっての法や統治の

<sup>1</sup> Leach(1988), pp. 197-260.

<sup>2</sup> 帝政期ローマの歴史家であるタキトゥスによれば、ティベリウスは「それぞれ呼名の異なった十二の広大な別荘でもって、この島を一人じめにしていた」という。Tac. Ann. 4, 67.

<sup>3</sup> Krause(2005), p. 241-247.;

McKay(1975), pp. 115-118.

<sup>4</sup> Plin., *Epist.*, 2, 17, 12; 2, 17, 20-21; 5, 6, 23.

<sup>5</sup> G. P. Carratelli (ed.), *Pompeii: Pitture e Mosaici*, vol. 4, Roma, 1993, p. 641.

外側にある世界を指していたのである<sup>6</sup>。ローマ人にとっての愛すべき自然とは、文明化の活動がもたらす手の加えられた自然であり、森とは自らの手の及ばない遠く離れた区域であった。

それでも、森はローマの風景画に描かれることが多い自然描写のひとつである。例えば、「アグリッパ・ポストゥムス荘」の《ペルセウスとアンドロメダ》(fig. 2-3)などがあげられる<sup>7</sup>。しかし、森の描写が表われるのはいわゆる「神話風景画」と呼ばれる風景画に偏っている。つまり、神話風景画というジャンルにおいて、領域外として認識される森は、生活範囲とは異なる遠い場所を示す舞台装置としての役割が与えられている。

次に、こうした神話風景画が室内にもたらす効果について考察する。古代ローマの人々が窓からの眺望に憧れを持っていたことは前述の通りである。しかし、本来このような眺望が得られるのは、狭い街路に囲まれた街中にある邸宅ではなく、郊外の高台にある別荘であった。神話風景画の特徴のひとつとして、「鳥瞰図的に描かれる」と言う点が挙げられるが、これはまさに高台の窓から見下ろす風景を模しているとも捉えられる。まさに絵画を通して窓の外の風景を見るような感覚を持ったのではないだろうか。そして、その背景として森が描き込まれていることにより、窓の外の風景は遠い神話世界とも接続する。部屋で絵を鑑賞する、あるいはそれを通して窓の外を眺めているはずのローマ人は、思いがけず神話世界

をも臨むことになるのである。

また、神話風景画における「森」の表現のように、遠い場所であることを示すアイコンが存在する。それは、エジプトやアジアなど、ローマにとって異国のモチーフを取り入れたものである。例えば、ローマ近郊ティヴォリにある「ヴィッラ・アドリアーナ」には、エジプトのナイル河の風景を模した池（カノプス）がある (fig.4)<sup>8</sup>。この地は皇帝ハドリアヌスの別荘であったため、個々に設えられたカノプスは自らの支配領域の誇示ともとらえられる。

こうしたエジプト趣味は皇帝に限らず、市民たちにも浸透し、なかにはエジプト由来の宗教が重んじられることもあった。そうしたなかで、エジプト的要素をもった風景画が多く描かれることになる (fig. 5)<sup>9</sup>。エジプト的要素は、こうした邸宅内に設えられた中庭や、その景色をのぞむことのできる前室などに描かれる例が多い。このような異質な描写を、いわゆる身近で現実的な自然描写と並置することで、窓の外に広がる風景を遠い世界とつなぎ、遠い異国の地が、あたかも窓のすぐ向こうにひろがっているかのような錯覚を起こさせるものとなっていたのだろう。

以上のように、ローマ壁画においてタブロー画のごとく描かれる風景画は、外界と室内とをつなぐ役割を果たしていた。それは時に、実際にはそこにはない風景を見せてくれる架空の窓のような装置として機能していたのである。

<sup>6</sup> Tac., *Ger.*, 2; Plin., *Nat.*, 3, 16, 2.; シャーマ(2005), pp. 101-104.; デスコラ(2019), p. 91.

<sup>7</sup> von Blanckenhagen and Alexander (1962), pp. 9-11.

<sup>8</sup> MacDonald, and Pint(1995).

<sup>9</sup> Barrett(2019), pp. 10-12.; Ling(1991), pp. 162-167.

参考文献

サイモン・シャーマ『風景と記憶』高山宏、  
梅正行訳、河出書房新社、2005年。  
フィリップ・デスコラ『自然と文化を越えて』  
小林徹訳、水声社、2019年。

Barrett, C. E., *Domesticating Empire: Egyptian landscapes in Pompeian gardens*, New York, 2019.

Krause, C., *Villa Jovis: l'edificio residenziale*, Napoli, 200.,

Leach, E. W., *The Rhetoric of Space: Literary*

and Artistic Representations of Landscape in Republican and Augustan Rome, Princeton, 1988.

MacDonald, W. L., and J. A. Pint, *Hadrian's Villa and its legacy*, New Heaven, 1995.

McKay, A. G., *Houses, Villas, and Places in the Roman World*, London, 1975.

von Blanckenhagen, P. H., and Alexander, C., *The Paintings from Boscotrecase*, Heidelberg, 1962.



Fig.1 ポンペイ「小噴水の家」  
ペリステュリウム、西壁中央



Fig.2-3 《ペルセウスとアンドロメダ》  
ボスコトレカーゼ「アグリッパ・ポストゥムス荘」神話の間、  
東壁中央 メトロポリタン博物館、ニューヨーク



Fig.4 《ナイル河風景》ポンペイ「外科医の家」  
ペリステュリウム、東壁



Fig. 5  
カノプス、ヴィッラ・アドリアーナ